

名作集一



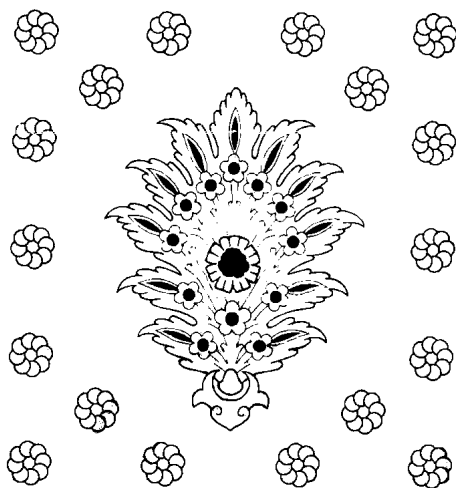
日本文学全集 86



名作集

(一)

明治編



集英社

日本文学全集

全88巻



86 名作集(一)

昭和五十年四月八日 初版
昭和五十五年七月十五日 三版

著者 山田美妙・他

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

101 東京都千代田区一ツ橋三ノ五ノ二

出版部 東京(230) 五三三
電話

販売部 東京(238) 三六二

印刷 大日本印刷株式会社

著者との了解により校印廃止いたします。
落丁本、乱丁本はお取りかえいたしません。

編集委員

伊藤 整
井上 靖
中野 好夫
丹羽 文雄
平野 謙

装
幀

後
藤
市
三

目次

武蔵野	山田美妙	七
初恋	嵯峨の屋お室	二
かくれんぼ	斎藤緑雨	四
滝口入道	高山樗牛	五
書記官	川上眉山	一〇
今戸心中	広津柳浪	一九
火の柱	木下尚江	二五
南小泉村	真山青果	二八
駅夫日記	白柳秀湖	三三

世間師	……	小栗風葉	三六
注解	……		三六
作家と作品	……	小田切進	三六
年譜	……		三七

名作集
(一)

明治編

武蔵野

上

山田美妙

この武蔵野は時代物語ゆえ、まだ例はないが、その中の人物の言葉は一種の体で書いた。この風の言葉は慶長ごろの俗語に足利ごろの俗語とを交ぜたものゆえたいがいその時代には相応しているだろう。

ああ今の東京、むかしの武蔵野。今は雖も立てられぬほどの賑わしさ、昔は関も立てられぬほどの広さ。今仲の町で遊客に睨めつけられる鳥も昔は海はた四五町の漁

師町でわずかに活計を立てていた。今柳橋で美人に拜まれる月も昔は「入るべき山もなし、ごくの素寒食であつた。じつに今は住む百万の蒼生草、じつに昔は生えていた億万の生草。北は荒川から南は玉川まで、嘘もない一面の青舞台で、草の楽屋に虫の下方、尾花の招引につれて寄りくる客は狐か、鹿か、または兎か、野馬ばかり。このような処にも世の乱とて是非もなく、このごろ軍があつたとみえ、そこには腐れた、見るも情ない死骸が数多く散っているが、戦国の常習、それを葬つてやる和尚もなく、ただところどころにばかり、退陣の時にでも積まれたかとみえる死骸の塚ができていて、それにはわずかに草や土やまたは敝れて血だらけになっている陣幕などが掛かっている。そのほかはすべて雨ざらしで鳥や獣に食われるのだろう、手や足が千切れていたり、また記標に取られたか、首さえもないのが多い。本当にこれらの人々にもなつかしい親もあろう、可愛らしい妻子もあろう、親しい交りの友もあろう、身を任せた主君もあろう、それであつてこのありさま。刃の串につんざかれ、矢玉の雨に碎かれて異域の鬼となつてしまった口惜しさはどれほどだろうか。死んでも誰にも祭られず……故郷では影膳をすえて待っている人もあろうに……」
「ふる郷に今宵ばかりの命とも知らでや人の我をまつら

む」……露の底の松虫もろとも空しく怨に咽んでいる。それならそれが生きていたうちは栄華をしていたか。なかなかそうばかりでもない世が戦国だもの。武士は例外だが、ただの百姓や商人など、鋤鉞や帳面のほかはあまり手に取ったこともないものが「サア軍だ」と駆集められては親兄弟には涙の水杯で嘔乞。「しかたがない。これ、作。死人の首でも取ってごまかして功名しろ」と腰に弓を張る親父が水鼻を垂らして軍略を皆伝すれば、「あぶなかつたら人の後に隠れてなるたけ早く逃るがいいよ」と兜の緒を緊めてくれる母親が涙を嚙交せて忠告する。ても耳の底に残るように懐かしい声、目の奥に止まるほどに昵しい顔をば「さようならば」の一言で聞捨て、見捨て、さて陣鉦や太鼓にせきたてられて修羅の街へ出かければ、山奥の青苔が褥となったり、河岸の小砂利が襖となったり、そのうちに……敵が……そら、太鼓が……右左に大将の下知が……そこで命がなくなつて、跡は野原でこのありさまだ。死ぬ時にはさぞ跳いたろう、さぞ死ぬまいと歯をくいしばつたらう。血は流れて草の色を変えている。魂もまた身体から居処を変えている。切裂かれた疵口からは怨めしうに臟腑が這いだして、その上には敵の余類か、金づくり、薄金の鎧をつけた蠅將軍が陣取っている。はや乾いた眼の玉の池の中

には蛆大將が勢揃。勢よく吹くのは野分の横風……変則の匂……血腥い。はや下。咄。だろ、日は函根の山端に近寄つて儀式どおり茜色の光線を吐始める。と末野はすこしずつ薄樺の隈を加えて、遠山も、毒でも飲んだかんだんと紫になり、原の果には夕暮の蒸発気がしきりに逃水をこしらえている。ころは秋。そここ我儘に生えていた木もすでに緑の上衣を剥がれて、寒いか、風に慄えていると、旅帰の椋鳥は愚顔にもすましきつて囀っている。ところへたいそう急足で西の方から歩行てくるのはわずか二人の武者で、いずれも旅行の体だ。一人は五十前後だろ、鬼髯が徒党を組んで左右へ立別かれ、眼の玉が金盞の内ぐるわに榎籠り、眉が八文字に陣を取り、唇が大土堤を厚く築いた体、それに身長が櫓の真似して、筋骨が暴馬から利足を取っている塩梅、どうしても時世に恰好の人物、自然淘汰の網の目をば第一に脱けて生残る逸物とみえた。その打撈はどんななか。身に着いたのは浅紺に濃茶の入った具足で、威もよほど古びて見えるが、ところどころに残っている血痕が持主の軍馴れたのを証拠立てている。兜はなく、乱髪が薬で括られ、大刀疵がいくらかもある蠟色の業物が腰へ反返っている。手甲は見馴れぬ手甲だが、じつは濃菊が剝が

れているのだ。この体で考えればどうしてもこの男は軍事に馴れた人に違いない。

今一人は十八九の若武者とみえたけれど、鋼鉄の厚兜がたいがい顔を隠しているの十分にはわからない。しかし色の浅黒いのと口に力身のあるところでぎッと推してみればこれもきつとした面体の者と思われる。身長はひどく大きくもないのに、具足が非常な太胴ゆえ、何となく身の横幅が釣合わるく太く見える。具足の威は濃藍で、魚目はいかにも堅そうだし、そして胴の上縁は離山路で簡単固まれ、その中には根笹のくずしが打たれてある。腰の物は大小ともになかなかみごとな製作で、鐔には、誰の作か、活々とした蜂が二疋ほど手彫になつてゐる。古いながら具足も大刀もこのとおり上等なところで見るとこの人も雑兵ではないだろう。

このころのならいとしてこの二人が歩行くうちにもあたりへ心を配る様子はなかなか泰平の世に生まれた人に想像されないほどであつて、茅葺の音や狐の声に耳を側てるのは愚なこと、すこしでも人が踏んだような痕の見える草の間などをば軽々しく歩行かない。生きた兎が飛びだせば伏勢でもあるかと刀に手が掛かり、死んだ兎が途にあれば敵の謀計でもあるかと腕がとりしばられる。そのころはまだ純粹の武蔵野で、奥州街道はわずかに隅田

川の辺を沿うてあつたので、なかなか通常の者でただ今の九段あたりの内地へ足を踏みこんだ人はなかつたが、そのすこし前の戦争の時にはこの高処へも陣が張られたとみえて、今この二人がその辺へ来かかつて見回すと千切れた幕や兵糧の包が死骸とともにあちこちに飛散つてゐる。この体に旅人も首を傾けて見ていたが、やがて年を取つた方が徐に幕を取上げて紋廻をよく見るとこれはじつに間違ひなく足利の物なので思わず雀躍した、「見なされ。これは足利の定紋じゃ。はて心地よいわ。」と言われて若いのもうなずいて、

「そうじゃ。酷いありさまでござるわ。あの先年の大合戦の跡でござるが、跡をとり収める人もなくて……。」

「女々しいこと。何でござる。思いだしても二方（新田義宗と義興）の御手並、さぞ高氏づらも身戦をしたろうぞ。あの石浜で追詰められた時という見苦しくあつてじゃ。」

「ほは和主、その時の軍に出なされたか。耳よりな……語りなされよ。」

「語り申そうぞ。ただし物語にまぎれて遅れては面目なからう。翌日ごろはいずれも決めて鎌倉へいでましなさるうに……後れては……。」

「それもそうじゃ、そうでおじやる。さらば物語は後になされよ。とにかくこの敗軍の体を見ればいとお心もひき立つわ」。

「ひき立つわ、ひき立つわ、糸のようにひき立つわ。和主もこれから見参して毎度手柄をあらわしなされよ」。

「これからはまた新田の力で官方も勢を増すでおじやる。楠や北畠が絶えたは惜しいが、また二方が世に秀れておじやるから……」。

「嬉しいぞや。早う高氏づらの首を斬りかけて世を元弘の昔に復したや」。

「それは言わんでものこと。いかばかりぞその時の嬉しさは」。

これでわかったこの二人は新田方だと。そして先年尊氏が石浜へ追詰められたとも言ひ、また今日は早く鎌倉へこれら二人が向うて行くと言ひるのでみると、二人とも間違ひなく新田義興の隊の者だろう。応答のうちにはいずれも武者気質の凛々しいところが見えていたが、比合わせてみると若いのは年を取ったのよりまだ軍にも馴れないので血脈気が薄いようだ。

それから二人は今の牛ヶ淵あたりから半蔵の塚あたりを南に向うて歩いて行つたが、そのころはまだ、この辺は一面の高台で、はるかに野原を見通せるところから

二人の話もたいいてい四方の景色から起っている。年を取つた武者は北東に見えるかたそぎを指さして若いのに向ひ、

「誠に広いではおじゃらぬか。いづくを見ても原ばかりじゃ。和主などはまだ知りなさるまいが、それあすのかたそぎ、のうあれが名に聞ゆる明神じゃ。その、また、北東には浜成たちの観世音があるが、ここからは草で見えぬわ」。

「浮評に聞える御社はあのことでおじやるか。見ればいとう小さなものじゃ」。

「あの傍じゃ、己が、誰やらん遅ましき、敵の大将の手に衝入つて騎馬を三人打取つたのは。その大将め、はるか对方に栗毛の逸物に騎つて押えてあつたが、己の働を心にく思いつろう、『あの武士、打取れ』と金切声立てておつた」。

「はははは、さぞ御感に入りなされたらう、軍が終つて。身に疵をば負いなされたか」。

「四力所負いたがいずれも薄手であつた。とてもあのやうな乱軍の中では無疵であらう者はおじゃらぬ。もちろん原で戦うのじゃから、敵も味方もその時はたいいてい騎馬であつた。が味方の手綱には大股（義貞）が仰せられたまま金鏈が縫ひこまれてあつたので手綱を敵に切離さ

れる掛念はなかつた。その時の二の大將（義興）の打撈は目覚ましいものでおじヤツたぞ。

「一の大將（義宗）もおじヤツたろう。」

「おじヤツた。この方もおなじような打撈ではおじヤツたが、具足の威がちと濃かつたゆえ、二の大將ほど目立ちなさらなかつた」。

おりから草木を烈しく搦^なつて野分の風が吹いてきた。

野原の急な風……それはなかなか想像のほかで、見る間に草の茎や木の小枝が砂といつしよにさながら鳥の飛ぶように幾万となく飛びたつた。そこで話もたちまち途切れた。途切れたか、途切れなかつたか、風の音に吞まれて、わからないが、まずはたしかに途切れたらしい。この間の応答のありさまについてまたつらつら考えれば年を取つた方はなかなか経験に誇る体があつて、若いのはすこし謙^{けん}深いようにみえた。そうでしょう、読者諸君。

そのうちに日は名残なくほとんど暮れかかつて雲の色も薄暗く、野末もだんだんと霞んでしまふころ、麥な雲が富士の裾へ腰を掛けてきた。原の広さ、天の大きさ、風の強さ、草の高さ、いずれも恐ろしいほどに苛^こめしくて、人家はどこかすこしも見えず、時々ははるか對方の方を馳^はせて行く馬の影がちらつくばかり、夕暮の淋しさはだんだんと脳を嚙^かんでくる。「宿るところもおじヤ

らぬのう。」「今宵は野宿するばかりじゃ。」「急ごうぞ。」「急ぎやれ。これだけの応答が幾度も試験を受けた。

「馬が走るわ。捕えて騎ろうわ。利主は好みなさらぬか。」「それおもしろや。騎ろうぞや。すわやこなたへ近づくと」。

二人は馬に騎ろうと思つて、近づくと群をよく視ればこれは野馬の簇ではなくて、大麥だ、敵、足利の騎馬武者だ。

「はッし、ぬかつた、気が注かなかつた。馬じゃ……敵じゃ……敵の馬じゃ。」「敵は多勢じゃ、世良田どの。」「味方は無勢じゃ、秩父どの。」「さても……」「思わぬ……」敵はまぢかく近寄つた。

「動くな、落武者。知らぬか、新田義興は昨日矢口で殺されてじゃ。」「なに、二の君が」。

「今さら知つたか、覚悟せよ。」「跡は降つた、劍の雨が。草は貫つた、赤絵具を。淋しそうに生まれでる新月の影。くやしそうに吹く野の夕風。」

中

「山里は冬ぞさみしさまさりける、人目も草もかれぬと

思へば」。秋の山里とてそのとおり、宵ながら凄（こ）いほどに
淋（さ）しい。衣服（いふぷく）を剥（む）かれたので瘦（や）れた體（てい）を立てている柿（かき）の
梢（えだ）には冷（ひや）笑（わら）顔（がほ）の月（つき）が掛（か）かり、青（あ）白（しろ）く牙（は）えわたった地面（ぢめん）に
は小枝（せうし）の影（かげ）が破（やぶ）隙（き）を作る。はるかに狼（おおかみ）が凄（こ）味の遠吠（とんぷい）を打
ちこむと谷間（やまのま）の山彦（やまひこ）がすかさずそれを送（おく）返し、望（もち）むかぎ
りは狭霧（せうき）が朦朧（もうろう）と立ちこめてほんの特許（とくしよ）に木下（きのした）闇（やみ）から照
射（さし）の影（かげ）を惜（おし）しうに漉（ぬ）らし、そして山氣（やまけ）は山嵐（やまのあらし）の合方（がた）と
なつて意地（いぢ）わるく人の肌（き）を噛（か）んでいる。さみしさ妻（さい）さは
こればかりでもなくて、曲（まが）りくねったさも悪徒（あくと）らしい古
木の洞穴（くわく）には梟（きょう）がああ怖（おそ）らしい両眼（りやうがん）で月（つき）を睨（にら）みながら
宿鳥（しゆくちう）を引裂（ひきちぎ）いて生血（なまぢく）をばたばた……

崖下（がき）にある一構（いっこう）の第宅（だいざい）は郷士（きやうし）の住処（すまゐ）とみえ、よほど古
びてはいるが、骨太（ほろ）く粧飾（しやうしやく）少（すく）く、夕顔（ゆがな）の干物（かんぶつ）を衣服（いふぷく）とし
た小柴垣（せうしばゐ）がその周囲（しうゐ）をとり巻（ま）いている。西向（さいかう）の一室（いつしつ）、そ
の前は植込（うゑこ）で、いろいろな木（き）がきまりなく、勝手に茂（も）ッ
ているが、その一室（いつしつ）はこの家族（かぞへ）がつねにいる室（むろ）だろ
う、今（いま）もそこには二人（ふたり）の婦人（ふじん）が……

けれどもまず第一（だいいち）に人の眼（め）に注（つ）まるのは夜目（よめ）にも鮮明（せんめい）に
若（わか）やいで見える一人で、言（い）わずと知れた妙齡（せうれい）の処女（ぢよ）。灯（とう）
火（か）は下等（げとう）の蜜燭（みつじやく）で作（つく）られた一里（いちり）一寸（いっすん）の松明（しょうめい）の小（こ）さいのだ
からあたりどころか、灯火（とうか）を中心（しん）として半径（はんけい）が二尺（にしゃく）ほど
へだたったところにはいっさい闇（やみ）が行（い）きわたっている

が、しかし容貌（かうぶつ）は水（みづ）ぎわだっているだけに十分（じふ）若い人と
みえる。年（とし）ごろはたしかに知（し）れないが眼鼻（がんび）や口（くち）の権衡（くわんかう）
がまだよくしまつていないところで考（かん）えればひどく長（なが）け
てもないいだらう。そのくせに坐（ま）又は（また）はなかなかあつて、
そして（少女（せうじよ）の手弱（てのじやく）に似（に）ず）腕首（うでくび）がたいそう太（ふと）く、その
上（うへ）に人（ひと）を見る眼光（やうがん）が……眼（め）は眼目縁（がんもくえん）を持つ（も）つていながら……
……、難（が）を言（い）は、凄（こ）い……でもない……やさしくない。た
だ肉（にく）が肥（ふ）えて臆（おそ）にやわらかい段（だん）を立たせ、眉（まゆ）がみごとで
自然（しぜん）に顔（かほ）をひき立たせたのでやや見（み）処（ところ）があるように見え
る。そのすこし前（まへ）までは白菊（はくぎく）を摺（すり）箔（はく）にした上衣（うわぎ）を着（き）てい
たが、今はそれを脱（ぬ）いでただ蒲（かき）の薄綿（うすわた）が透（とお）いて見える葛（くわ）
の衣服（いふぷく）ばかりでいる。

これと対合（たいが）っているのは四十前後（しじうぜんご）の老女（らうじよ）で、これも着
物は葛（くわ）だが柿染（かきぞめ）の古ぼけたので、どうしたのか砥粉（おとこ）に塗（ぬ）
れている。顔形（かんとけい）、それは老若（らうじやく）の違（ちが）いそはあるが、ほとほ
と前の婦人（ふじん）と瓜（うり）二つで……ちと輕卒（けいそ）な判断（はんぱん）だが、だから
この二人（ふたり）はたぶん母子（ぼし）だろう。

二人（ふたり）とも何（なん）やら浮（う）かぬ顔色（かおいろ）で今（いま）までの談話（だんわ）が途切（とぎ）れた
ような体（てい）であつたが、しばらくして老女（らうじよ）はきつと思（おも）いつ
いた体（てい）で傍（かたわら）の匕首（し）首（くび）を手（て）に取（と）り上げ、

「忍漢（にんかん）、和女（わにょ）の物思（ものおも）も道理（だうり）じゃが……この母（はは）とていとう
心（こころ）には掛（か）かるが……さりとて、こやそのように、忍漢（にんかん）太（ふと）

息吐くようでは、太息のみ吐いているようでは武士……まことよ、世良田三郎の刀禰の内君には……聞けよ、この母の言葉を、見よ、この母の衣を。和女はよも忘れはせまい、和女には実の親、己には実の夫のあの民部の刀禰が這回二の君の軍に加わって、あつぱれ世を元弘の昔に復す忠義の中に入ろうとて、世良田の刀禰もろとも門出した時、己は、こや忍藻、己は何して何言うたぞ。己が手ずから本膳に磨上げた南部鉄の矢根を五十筋、おのおのへ二十五筋、のう門出の祝とさし出して、忍藻聞けよ——『二方のうちのどなたでも前櫓で敵を引受けなされるならこの矢根に鼻油引いて、兜の金具の目欲しいをつけおるを打止めなされよ。また、殿で敵に向いなさるなら、鹿毛か、葦毛か、月毛か、栗毛か、馬の太く逞しきに騎った大将を打取りなされよ。婦人の甲斐なさ、それよ忠義の志ばかりでおじやるわ』。とこの眼から張切りようする涙を押えて……おお己は今泣いてはいぬぞ、忍藻……己も武士の妻あだに夫を励まし、智をせいたぞ。それを和女、忍藻も見ておじヤッタろうぞのう。武士の妻のころばえはかほどのうてはならぬわ。さればこそ今日までも休まず、夫と智とは家にはおらぬが、己が矢根を日々磨澄まして、おなじ忠義の刀禰たちに与うるのじや。こう衣は砥粉に塗れてもなかなかにうれしいぞイ、

さすれば。

「まことよ。仰は道理におじやる。妾とてなど……」。

「心からさならこの母もうれしいわ。見よ、のう、このじ首を。門出の時、世良田の刀禰が和女にこそ残して再会の記念となされたらうよ。それを見たらよしな、女らしい心は、刀禰に対して出されまい。和女とてひとわりは武芸をも習うたのに、近くは伊賀局などを龜鑑となされよ。人の噂にはいろいろの詐偽もまじわるものじや。軽々しく信ければ後に悔めることもあらうぞ」。

言いきつて母は返辭を待兒に忍藻の顔を見詰めるので忍藻もしかたなさそうに、挨拶したが、それもわずかに一言だ。

「さもそうず」。

母もおぼつかない挨拶だと思ふような顔つきをしていたがさすがになおしいとも言いかね、やがてやや傾いた月を見て、

「夜も更けた。さらば己はこれから看經しようぞ。和女は思いのまにまに寝よ」。

忍藻がうなずいて礼をしたので母もそれから座を立つて縁側伝に奥の一間へようよう行つた。跡に忍藻はただ一人起つて行く母の後影を眺めていたが、しばらくして、こらえこらえた溜息の振が一度に切れた。

話の間だがちよつとここで忍藻の性質や身上がややつまびらかに述べられなくてはならない。まことに忍藻はこの老女の実子で、父親は秩父民部として前回武蔵野を旅行していた旅人のうちの年を取った方だ。そして旅人の若い方はすなわち世良田三郎で、母親の話でもたいいていわかるが、忍藻にはすなわち夫だ。

この三郎の父親は新田義貞の馬の口取で藤島の合戦の時主君とともに戦死をしてしまい、跡にはその時二歳になる孤子の三郎が残っていたので民部もそれを見て不惑に思い、引取って育てるうちに二年の後忍藻が生れてきた。ところが三郎は成長するにしたがつて武術にも長けてきて、なかなか見処のある若者となつたので養父母もおおきに悦び、そこでそれをついに娘の嫁にした。

その時三郎は十九で忍藻は十七であつた。今から見ればあまりな早婚だけれど、昔はそのようなことにはすこしもかまわなかつた。

それで若夫婦は中よく暮していたところが、ふと聞ば新田義興が足利から呼ばれて鎌倉へ入るとの噂があるので血氣盛の三郎は家へひき籠もつて軍の話を素聞にしていられず、舅の民部も南朝へは心を傾けていることゆゑ、難なく相談が整つてそれから二人はいっしょに義興の手に加わろうとして出立し、ついに武蔵野で不思議な危

難に遇つたのだ。その危難にあつたことが精密ではないが、うすうすは忍藻にも聞えたので、さアそれが忍藻の心配の種になり、母親をつかまえて鬱ざだすのでそこで前のとおり母親もそれを諭して励ましていた。

「門前の小僧は習わぬ経を誦む」。鍛冶屋の嫁はしだいに鉄の産地を知る。三郎が武術に骨を折るありさまを朝夕見てゐるのみか、乱世の常としてたいいていの者が武芸を収める常習になつてゐるので忍藻も自然太刀や薙刀の事に手を出してくると、したがつて挙動も幾分か雄々しくなつた。手首の太いのや眼光のするどいのはまづそのためだろう。けれど今あからさまにその性質を言おうなら、なるほど忍藻はかなり武芸に達して、一度などは死にかかつてゐる熊を生捕にしたとて毎度自慢が出たから、心も十分猛々しいかといふにまづたくそうでもない。その雄々しく見えるところはただ時々身の身の挙動と言葉のありさまにあつたばかりで、その婦人に固有の性質は（ことに心の教育のない婦人に固有の性質は）跡を絶つてはいない。たしかになくなつてはいない。

母がたち去つた跡で忍藻は例の匕首を手に取り上げて抜き、しばらくは水の光を瞻詰めてきつとした風情であつたが、またその下からじきに喘息が出た。

「匕首、この匕首……さきにも母上が仰せられたごとく